

社団法人日本海員掖済会 小樽掖済会病院 消化器病センター

【住所】北海道小樽市色内1丁目10番17号 【病院長】佐々木一晃先生 【病床数】154床
【内視鏡検査・治療総数】6,718件（平成22年度）
上部内視鏡検査3,896件、下部内視鏡検査2,537件、ERCP180件、小腸内視鏡検査108件
【スタッフ】医師5名、看護師9名（うち内視鏡技師6名）、他5名
【スコープ本数】上部用14本、下部用11本、十二指腸用4本、小腸用3本、その他2本



消化器分野に特化したスペシャリストたちが 患者利益を最大化する先端医療を地域に提供

増加する症例数への対応と 患者ホスピタリティの向上のため 機能強化した消化器病センターが誕生

観光地として有名な小樽市の旧繁華街に位置する小樽掖済会病院は、外科・肛門外科、消化器内科、整形外科の3つの診療科で構成され、主に消化器分野に特化した高度医療を提供しています。同院の主な医療圏は小樽市内および後志地区ですが、全国的にも最先端かつ高度な検査や治療を行っていることが口コミで広まり、余市、ニセコ、倶知安、寿都町、岩内町などの広範囲から患者様が集まっています。

小樽掖済会病院の消化器病センターは、前身である内視鏡検査部から機能強化し2007年にオープンしました。電子カルテシステムを用いたカンファレンスが即時行える広い内視鏡処置室3部屋と、専用受付と待合室、4つのベッドを備えたリカバリー室を備え、年間7,000件近い検査や治療を行っています。レイアウトについて特に工夫された点について消化器病センター長の勝木伸一先生に伺ったところ、「救急搬入がスムーズに行えるよう、病院の

南玄関とセンター前のエレベーターが直結するような配置にしました。待合室にはTVや雑誌を用意し、患者様が緊張せず検査をお待ちいただけるよう配慮しています。リカバリールームは監視カメラで常時モニタリングし、セデーションがかかった患者様が転倒されることのないよう注意しています」とお答えいただきました。



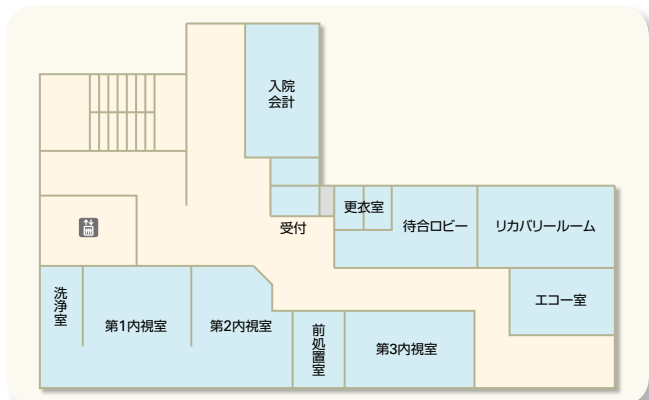
副院長・消化器病センター長
勝木 伸一 先生

あらゆる内視鏡診療を可能にする最新設備で 患者利益を追求した質の高い医療を提供

154床の中規模病院でありながら、消化器病センターにはあらゆる消化器疾患に対応可能な最新設備が備えられています。保有するX線装置はフラットパネルディスプレイ搭載Cアーム型で、ERCP時にあらゆる角度から透視撮影が行えるため、ガイドワイヤやステントの位置を正確かつ効率的に確認することができます。また、MRCPで使用するMRIやヘリカルCTなどを用いてより確実な診療を実践しています。最近ではCTコロノグラフィーを検診で実施し始め、高い評判を得ているそうです。

2004年にはダブルバルーン内視鏡（DBE）を導入し、北海道では最多の年間約150件（現在まで総件数約800件）の小腸内視鏡検査を実施しています。胃全摘Roux-en-Y吻合、BillrothⅡ法再建後のブラウン吻合患者などに対するERCPにもDBEを活用しており、現在までにDBEによるERCPを60例以上行っています。また、経鼻内視鏡やカプセル内視鏡などの侵襲性の低い検査機器を早くから導入し、患者様により広範な検査や治療の選択肢を提供しています。

▶次ページへつづく



消化器病センターのレイアウト



Defining tomorrow, today
in Endoscopy.

2010年7月には、小樽・後志地区で第1号となる大腸ESDの先進医療認定を受けました。大腸ESDは現在まで累計で500件以上施行しており、これは道内でもトップクラスの症例数だそうです。勝木先生は、「病院の規模から考えても設備は非常に充実しており、タイムラグが少なく新しい機器に更新できていると思います。最近では、患者様ご自身が当院の設備や治療実績を知って来院されることも少なくありません。我々の使命は患者利益を最大化する高度先端医療を地域に提供することですが、こうした日々の努力の成果として多くの患者様に来院いただいております、また医師やスタッフ全員がコスト意識を高くもって診療にあたっているため、内視鏡診療で利益が出せる構造を確立しています。その結果として、効率的かつ迅速な設備投資が実現しているのではないかと考えています」とお話しいただきました。



FPD搭載Cアーム型透視装置



待合室ではTVや雑誌を見ながら、リラックスして検査をお待ちいただけます。

大腸ESDをはじめとする 高度先進医療を支えるのは内視鏡に特化した コメディカルとのチームワーク

同院は日本消化器内視鏡学会、日本消化器病学会の指導施設でもあり、年に1~2名は必ず臨床研修医を受け入れ、積極的に人材育成を行っています。症例数が多く、また広範な消化器診療に直接携われることから、消化器病センターは若手医師が短期間で効率的に技術を身に付けるのに最も適している環境だと言えます。勝木先生は、「スコープ挿入の指導も、部位ごとに区切って段階的に訓練するようにしています。上部内視鏡検査であれば、咽頭通過までを10回ほど繰り返すを行い、完全にコツをつかんでから次のステップに移ってもらいます。これは一連の流れで目的部位まで挿入するよりも各ポイントで必要なテクニックを習得しやすく、確実に技術が身に付くよう工夫しています」とご説明いただきました。また、学会活動や研究発表も奨励しており、国内学会だけでなくAGAやUEGWなどの海外学会においても年に1~2回発表者を出しているそうです。

消化器病センターでは、センター化に伴い内視鏡専属の師長と主任を配置するなど、コメディカルスタッフを専属化して専門性を高めています。現在同センターに所属する内視鏡技師は8名で、配属後にキャリアを積んで資格を取った方も少なくないそうです。

内視鏡診療の経験豊富な勝木先生と副センター長の藤田朋紀先生には若手の看護師が介助につき、一方で若手の医師にはベテラン看護師の介助という組み合わせで、日常診療の中でお互いにサポートしながらスキルアップできるような体制を取っています。また、ESDなどの高度な治療が増えているため、専任の臨床工学技師が内視鏡関連機器のメンテナンスや保守管理を担当しています。勝木先生からは、「エンドスコーピナーズの育成には特に力を入れており、学会活動にも積極的に参加して最新の知識を習得してもらっています。内視鏡の洗浄消毒やトレーサビリティの管理は学会が推奨する最新の方法に常に更新して実践しており、安全管理のためにマニュアルも作成して全員で共有しています。ただ、マニュアルというのは最低限必要なことを標準化したものであり、突発的な事態に的確に対応するためには普段から自分の頭で考え、ロジカルに行動する必要があります。マニュアルに頼りすぎることがないように日ごろから指導しています」と、スタッフ育成の実際についてご説明いただきました。

最後に勝木先生に今後の展望をお伺いしたところ、「現在、自走式のカプセル内視鏡などの新しいデバイスの研究や開発にもかかわっており、ここからどんどん新しい情報やアイデアを発信していきたいと思っています。これから内視鏡を専門にやっていきたいと思われている先生には、当院のような病院規模でも最先端の内視鏡診療が経験できることをぜひ知ってほしいですね。診療科が少ないから必要な検査も迅速に行えますし、症例数も多いので技術の習得や研究などには最適な環境です。また、地域住民に対する市民公開講座を毎年開催していますが、今後もこのような活動を通して患者様や地域の皆様に向けての情報発信を行い、当院でどんな検査や治療が受けられるのか、理解をより深めてもらえるよう努めていきたいです」とコメントをいただきました。

日常業務で非常に多忙な中、最新の機器を使いこなして専門性の高い手技を習得していくことは、先生方だけでなくスタッフの皆さんも多大な努力を必要とすることだと思います。消化器病センターでは、意欲的で専門性の高いスペシャリストたちが結集し、医師とコメディカル、そして院内スタッフ皆が風通しの良い環境で協業し、このような高いハードルを越えられているのだということを実感しました。



消化器病センターのみなさん